

自覺に於ける直觀と反省 (承前)

西田幾多郎

三十九

既に論じた如く、すべて直接にして具體的なる實在は自覺的である、之を思惟の經驗或は論理的實在の型に依つて云へば、ヘーゲルの云つた如く、すべてが推論式的であるとも云ひ得るであらう。余は思惟の經驗といふものも、普通に考へられる如き單なる主觀的作用ではなくして、フイドルの考の如く、言語をその表現として内外の兩面を有する獨立の一實在であると思ふのである。精神と物體とは異なる二つの實在ではなくして、自覺的なる具體的實在の兩面である。推論式に依つて云へば、向に云つた如く、その大前提の方が物體界を表はし、小前提の方が意識界を表はすと考へることができるのである。物體界とは我々の直接經驗即ち實在を何處までも一般化した可能的世界である、之に反し意識界とはその特殊化せられた即ち限定せられた現實の世界である。我々は先づ時々刻々の經驗を自己の意識範圍内に於

74
て一般化し、更に之を社會的經驗に於て陶冶し、終に全く人格的要素を除去し、所謂理性に依つて純化し、斯くして物理學者の所謂物理的世界なるものが構成せられるのであるが、所謂物理的世界といふのは實在の一方面であつて、實在其物ではない。具體的なる眞實在は何時でもこの現實である、現實が何處までも全實在の中心となるのである、物理的知識に客觀性を與へるものもこの現實である、精神界と物體界との接觸點、或は精神界と物體界との分岐點も實に此處にあるのである。我々の自覺的經驗に就て考へて見ると、我が我を反省する所、即ち我が働く所、そこが我の現在である。普通には、働くと否とに關せず、それ自身に不變なる自己があつて、現在の私の働かば之から起ると考へられる、即ち不變なるものが實在と考へられる。併し私の我たる所以は、斯く自己が自己を反省する所にあるのである、省みる自己と省みられる自己と同一なる所にあるのである。この事實即行爲 *Tathandlung* の外に我はない、此處に私の全體がある、過去の我も眞の我ではない、未來の我も眞の我ではない、眞の我は唯現在の我である。我々は現在の我を中心として、過去の我を想起し、未來の我を想像するが、想起せられた我も、想像せられた我も、眞の我ではない、唯現在の私の表象としてその一部分を成すまでである。我々は行動に於て過去の我と接續すること

はできるが、過去の我に還ることはできぬ、所謂 *le passé est passé* である、眞の自己はこの現在の能働的自我である。考へられた我は限定せられた我であつて、之からは何物も出て來ない、之には何等の創造的作用もない、決定論者の考は我を對象として考へるより起るのである。

現在が實在の重心であると考へられるのは、我々の經驗の動き行く尖端なるが故である、それ自身に動くもののみ實在といふことができるのである。併し今若し無限なる經驗體系を與へられたものとして考へて見ると、我々の經驗の動くといふことは立場の推移と考へることができらるであらう。例へば或一つの立場に依つて統一せられた經驗の體系を一つの圓の如きものと考へ、無限なる經驗體系の結合を無數の圓が或一點に於て内接して居る如く考へて見ると、此點の切線に垂直なる直線、即ち無數なる圓の中心を貫く直線が經驗の動き行く方向であつて、ベルグソンの所謂流るゝ時 *le temps qui s'écoule* ともいふべき眞の時の方向と考へることができらるであらう。經驗の推移には二種あると考へることができらる、一つは同一の立場に基く經驗の發展である、即ち一つのアプリアオリに基く發展である、他の一つは立場の推移である、一つのアプリアオリから背後の大なるアプリアオリに移り行くことである。前

者を一直線の延長の如きものと考へて見れば、後者はマールブルク派で考へる様に、極限概念に依つて一つの曲線から他の曲線に移り行く如きものと考へることができ、即ち創造作用の發展の方向である。併し前者の意味に於て無限の延長といふも、數の無限と同じく之を一つの體驗に纏めて考へることができるのであるから、經驗全體の絶對的統一點は體系と體系との無限なる系列の統一點にあると考へねばならぬ。而して我々の實在と考へるものは統一せられた經驗であるとすれば、此の如き統一の極限が絶對の眞實在でなければならぬ。實在的と考へられるものは、理想的なるもの、極限である、數理は理論の極限となり、連續數は分離數の極限となるのである。而して右の如き無限なるもの、統一、即ち絶對的統一とはそれ自身に獨立し、それ自身に動くといふことである、即ち自覺的であるといふことでなければならぬ、それ自身に動くものにして、はじめて眞の無限といふことができるのである、止るものは有限であり、動くものは無限である。我々の現在とは此の如き無限なる實在の統一點である、我々はこの現在に於て無限の實在と連絡し、此點から無限の實在に移り行くことができるのである。現在とは經驗の一體系が己を統一すると共に己を超越して、他の體系に移り行く點である、即ち己自身の根柢に還り行く點である。

右の如き譯であるから現在には創造的進化の動き行く尖端と考へられると共に、過去に還る反省の點と考へられるのである。我々は意志に依つて未來に進み行くと考へると共に、反省に依つて過去を省みることができると信じて居る、現在は實に此兩方向の結合點である。併し翻つて考へて見れば前に云つた如く、我々が過去を反省するといふのは、我々は一瞬の過去にも還ることができぬといふ考と衝突せざるを得ない、此處に深き論理的矛盾がある、此矛盾は如何に解くべきであらうか。

マートルリンクは「過去」と題する小論文の中に、過去は過ぎ去りたるものではない、過去は何時でも現存して居る、過去は動かすべからざるものではない、過去は我々の現在に從屬し、現在と共に動くのである、唯道徳的に死せるもののみ、過去は固定したものと云つて居る (Maeterlinck, *Le Temple Enseveli*, p. 208)。余はマートルリンクの此考を目的論的因果に依つて考へて見たいと思ふ。機械論的因果關係では或は過去は動かすことのできないものと考へられるかも知らぬが、目的論的因果關係に於ては現在及び未來によつて過去の意味を變ずることができると考へられる。目的論的因果に於ては、過去は現在及び未來の手段である、將來に進み行く途によつて過去の意味が變ずると考へることができると考へる。アウグスチヌスの回心以前の生涯は彼が回心

以後の生涯に依つて如何にその意味が變ぜられたかを見よ。オスカ・ウィルドは、希臘では神も過去を變ずることができぬと考へられたが、キリストは如何なる罪人にて容易に過去を變ずることができ、これを教へた例の放蕩息子が父の前に跪いて泣いた時彼は彼の過去を最も美しき神聖なものとなしたと云つて居る。雷に此の如き道德的生活に於て然か考へられるのみならず、すべての目的論的因果に於ても、然か考へることができると思ふ。絶對時といふものがあるとするれば、我々は一瞬の過去にも還ることができぬと考へねばならぬのであるが、絶對時といふ如きことは單に思惟の要求であつて、實在なるものではない。機械觀と絶對時との間にも必然的結合があるのではない、物理學者の時とは單に一つの坐標に過ぎない。實體の方から云へば、機械觀に於ては却つて同一の現象を繰返し得ると考へねばならぬ。我々が同一の現象を繰返すことができぬと考へるのは體系の全體を與へられたものとして考へるが故である。我々が時計の面盤に於て時を知る様に、時を空間化して考へた時、全體系が固定せらるゝと共に、その順序は動かすべからざるものとなる、機械觀と絶對時とか結合せられて考へられるのは之に依るのである。ベルグソンの云ふ如き眞に反省のできない時は繰返し得ると考へることもできぬと共に、

繰返し得ぬと考へることもできぬ。我々が経験を對象化して、その全體の統一を想像する時、動かすべからざる時といふものが考へられるのであるが、此の如き統一は無論之に達することは不可能である。全経験の統一といふことは單に我々の要求に過ぎない。縱、全経験の内容が有限であつて、意識し盡されたとしても、之を意識すると云ふことが既に新なる経験である、斯くして無限に新なる経験がなければならぬ。併し全経験の最終統一に達することができないと云ふことは、経験に統一がないと云ふことではない。統一の豫想せられない経験は成立し得ない、コレーンの云ふ如く與へられるものは要求せられたものである。それで全経験の統一といふことは要求の統一である、作用の統一である、之を知識の中に求めることはできぬが、意志の中に求めることができるのである。

自覺といふ中には、單に自己を對象として意識するといふばかりではなく、情意の意識が含まれて居ると思ふ。自覺に於ては知るといふことは行ふといふことであり、行ふといふことは知るといふことである。我々は普通に意志を認識の對象とすれば、意志ではなくなると云ふが、我々の自覺に於ては然か考へることはできぬ。自覺に於ては知と意との區別は抽象的區別であつて、具體的にはこの兩者は直に一で

80
なければならぬ。背理の様ではあるが、我々が自己を反省することができないと知るのは、即ち自己を知る所以である。單に自覺の場合に於てのみではなく、一つの連續的直線といふ如きものを意識する場合に於ても、其中に作用の意識といふものが含まれて居ると思ふ。我々は一つの連續的直線といふ如きものを意識した時、我々は其中に表象することのできないものが意識せられて居ると考へねばならぬ、即ち思惟對象が直覺的に意識せられると考へねばならぬ。我々が表象的意識から嚴密なる意味に於ける連續といふ如き思惟對象の意識に達するには、その間に作用の意識が入つて來なければならぬ、リッブスの所謂 *Einschneppen* といふ如きものが入つて來なければならぬ。そこには一つのエラン・ヴェイタールがなければならぬ。連續の意識の中には作用の意識が入つて居る、即ち意志が入つて居る、數學者の所謂極限概念の中に意志の意識が含まれて居るのである。我々の意志といふのは極限の意識である、アプリオリからアプリオリに移る場合の意識である、我々の意識がエラン・ヴェイタールに接觸する所、そこに意志があるのである。意志が認識對象となつた時、もはや意志ではないと云ふが、我々が連續といふものを意識する以上は、作用が意識せられると考へねばならぬ。意識すると云へば、我々は必ず認識對象として意識すること

あると考へる、而してその對象は實在の世界に屬せずして、單に意味の世界に屬するものと考へられる。併し意識するといふことは、認識するといふことのみではない、意志も感情も皆意識の一種である、我々が或物を意志する時その事自身が意識せられて居らぬと考へることはできない。ブレンタノなどの考の様に、意識を我と對象との關係として考へて見ると、意志とか感情とかいふのは知識と全く異なつた對象的關係と考へねばならぬ。知識に於ては我と對象と對立して居るが意志や感情に於ては我と對象と合一して居ると考へねばならぬ、即ち我と對象との一致した意識がある、と考へねばならぬ。我々は、内省的經驗の上に於て、明に私が知る、私が欲する、私が感ずるといふことを區別して、意識することができ、私が欲するといふことを知つた時、その意志は知識對象となることは云ふまでもない、併し我々は過去の意志を知る時、意志として之を知るのである、私が欲したとして之を知るのである、反省に依つて此の如き意識の意味が變るのではない。過去の意志が反省せられた時、その性質が變ぜられるかの様に考へるのは、意識對象の性質を一樣に考へる故である、單に知識對象となるといふ語に拘泥するが爲である。我々が意識するといふとは必ずしも認識するとは限らない、認識對象は意識對象であるが、意識對象は必ずしも

認識對象ではない。藝術家の所謂「骨」といふ如きものも明らかに一種の意識ではあるが、藝術家は之を認識對象として意識するのではない、唯一種の力として之を意識するのである。若し之を認識對象として意識した場合には、「骨」ではなくなるのである。此の如き意識は概念的に考へるとか、言語に表はすとかいふことのできないものであるかも知れない、併しそれが爲に不明瞭な意識と考へるのは誤である。意志とか感情とかいふものも、知識と同じく、明瞭な意識でなければならぬ、藝術家の感ずる所が、思索家の考へる所に比して、その明瞭や精細の度に於て劣るものとは思はれない。我々が過去の意志や感情を想起した時、それは既に知識の對象であつて意志や感情でないとか考へるといふのは、如何なる理由に依るのであるか。右に云つた如く、意志や感情はそれ自身に於て明瞭な意識であつて、之を想起した時、明に知識と區別せられるならば、何に依つてそれが知識對象であつて意志や感情ではないと考へられるのであるか。知情意の區別を空間の三次元の如きものに比して見ると、我々は先驗的空間の形式に依つて、個々の方向を意識し、理解する如く、過去の知情意を區別するのも、現在の知情意と共に、知情意の基たる先驗的知情意の方式に依つて識別するのではなくからうか。我々が過去の意志や感情を想起するのは、つまり現在の意志や感

情と同一方式に於て意識するのではなからうか。意、意と接し、情、情と感ずるのである。つて、意志や感情が普通に考へられる如く、知識對象となつて意識せられるのではな
 い。我々は過去に於て斯く欲したと意識した時、之をして意志の性質を失はしめる
 ものは過去といふ考の附加であるとすれば、現在斯く欲すると意識した時も、この現
 在といふ考の附加は現在の意志をして意志の性質を失はしめる譯である。意志は
 之を意識し得たとすれば意志ではなくなり、何等の意味に於ても意識し得ずとすれ
 ば、意志といふものはない、此の矛盾は過去の場合でも、現在の場合に於ても同様であ
 る。意志は直接に意識せられるか、然らば意志といふ意識はなくなるのである。

若し意志が直接に意識せられるとするならば、過去の意志を意識するも、現在の意志
 を意識する同様である、換言すれば意志には時間的差別はないと云ふことゝなる、意
 志は思惟と同じく所謂時間的關係を超越した意識であると考へねばならぬ。而し
 て、更に時間的關係を超越するのみならず、意志の統一は思惟の統一よりも尙一層深
 き意味の統一であると考へることができ、思惟の根柢に意志があると云ふことが
 できる。經驗體系を組織する眞の一般者は、一般概念ではなくして、一つの動機であ
 る、思惟ではなくして、意志である、眞に己自身に依つて立つ自動的經驗體系は意志の

形であると云はねばならぬ。斯く考へて見れば、意志の直感といふことが却つて知識的統一の基となり、時間的統一の前に意志の直感がなければならぬこととなる。過去の思想を想起する場合に就て見ても、我々が過去の思惟を想起した時、心理現象としての思惟作用は、過去の出來事として、知識の對象に屬するが、過去に於て思惟作用をして思惟作用たらしめた意味は自然界には屬しない、而して過去に於て思惟作用を思惟作用たらしめた意味は又現在に於て思惟を思惟たらしめるものである。我々は現在に於て過去の思惟を想起する時、此の如き意味の立場に立つて見るのである。二次元の世界に居るものは三次元の意味を理解することはできぬ、縦、二次元の世界に於ける圖面が三次元の射影であるとしても、到底之を理解することはできぬ。二次元の世界に於ける圖面を三次元の射影として理解するには、我々は一たびこの二次元の世界を離れて見ねばならぬのである。我々は過去の思惟を想起するにも、一たび超時間的意識の立場に立たねばならぬ、思惟の内容は過去と現在とに於て變はない、唯之を意識する作用に於て異なるのみである、意識したといふことは思惟の内容其物に何等の變化も與へない。「太陽の表象は輝かない」と云ふが、その變化は想起の爲に起るのではない、知覺と表象とは作用に於て異なつて居るのである。

意識するといふことは存在するといふことと同じく、意識の内容及び性質に何等の關係もない。物が何回現れても物其物に何等の變はないと同じく、同一の意志が何度働いても意志其物は同一と考へることができ。すべて精神現象は一度限りのものと考へられるのは、意識せられるといふことをその本質と考へ、而して之を時間上に起る出來事を考へるに依るのであるが、嚴密に斯く考へるならば、心理現象の間には何等の關係も統一も考へることはできぬ、此の如きものは心理現象といふべきものではなくして純粹なる事實といふ如きものであらう、従つて物理現象とも解することができるのである。心理學者が意識さるゝといふことを條件として、心理現象といふものを考へるのは、既に個人的主觀に依つて現象を時間的に統一して居るのではなく、單に意識といふものがあるとするれば、それは物理的でもなければ心理的でもない、云はねばならぬ。

以上述べた如く意志とか感情とかいふ如き意識は知覺とか思惟とかいふ如き所謂知識作用から根本的に區別せられ、我々が之を想起した場合に於ても、意によつてのみ意を會し、情によつてのみ情を感ずることができ、而して意志に於ては我と對象とが一致し、意志は意識の根本的統一であるとするれば、知識に於て、我は我と合一する

ことができず、一瞬の過去にも還ることができないと考へられたが、意志に於ては、時間を超え、却つて時間を創造する絶對的自由の我に返ることができると考へることができると考へる。意志に於ては、對象界は單なる對象ではなくして、手段である、對象其物が一つの活動となるのである、我は我自身に還つて對象界を支配する位置に立つのである。「我が意志する」といふ時、我は時間的關係を超越するのである、目的論的因果關係に於ての様に、意志は時間的關係を離れた原因である、時間的關係は却つて意志によつて成立つのである。カントが定言的命令を自然的因果の外に考へ、フイヒテが知識的世界の根柢に實踐的自我を考へたのも、深き意味あることと思ふ。若し時間的語を以て云へば、意志に於ては、過、現、未を通じてすべての對象界が現在であると考へることができ、マールテルリンクと共に、我々の過去は全然我々の現在に屬し、絶えず之と共に變ずるといふことができる。ベルグソンは純粹持續に於ては一瞬の過去にも還ることはできないと云ふが、創造的進化の状態に於ては、却つて過去全體が現在として働くこと考へることができ、我々は創造的進化の純なる状態に達することができ、程、我の深き根柢に達し、過去を現在化することができると考へることができるのである。ベルグソンは「物質と記憶」に於て記憶の全體を圓錐形に

比し、その底面を過去とし、その頂點を現在と考へ、圓錐はその底面から絶えず頂點に向つて進み行くと考へて居るが、我々が出来るだけ圓錐の廣き底面に返つて、そこからその頂點に向つて集中すればする程、過去全體が現實となると考へることが出来る。向に現在を物體の重心に比したが、物體の重心といふのはすべての力の働く點である、物體を構成するすべての物質の重力が現在となる點である。我々は知識に於ては反省に依つて過去に返ることができないと考へられるが、意志に於ては全過去を現在となすことができる、意志に於てはすべての經驗内容が、動的状態に於て統一せられるのである。正しく云へば、すべてが動的となる時は、過、現、未の區別は消滅する、即ち時間を超越するのである、ロッセの云つた如く、時間は動的實在の形式ではない、單に現象の形式に過ぎないのである。我々は過去を想起する時、過去は記憶表象として我の現在に屬すると云ふが、斯く過去を現在たらしむるものは意志である、想起作用といふ意志の形に於て過去が現在となるのである。現在に於て想起されたものは過去の我でない、と考へられるのは、認識的自我に對して全自我を考へる故であらう。抑過去の我に返ることはできないと考へる時、過去の我とは如何なるものを指すのであらうか。若し過去に於ける直接經驗の内容の如きものを指すなら

ば、現在に於てのみならず、過去に於ても、同じく反省がでしなかつたと考へられねばならぬ。之に反し、若し過去に於て、現在の我が我を知るといふ意味に於て己自身を知り得たとするならば、現在に於て之を知ることとも可能と考へられねばならぬ。反省せられた自己、即ち苟も認識の對象となつた經驗内容は一般的でなければならぬ、即ち作用を超越したものと考へられねばならぬのである。眞に反省のできないものは意志其物でなければならぬ、自己其物でなければならぬ、而して此の如き意志は時間的順序を超越して居るのである。我々は過去に返ることができぬと考へるのは、時を無限の直線の如きものとなし、自己をその線上に進み行く一點の如きものとして考へ、一次元の上に動く點は一瞬の前にも還ることができないと考へるのであるが、我々が之を意識した時、既に二次元の世界に立つて居る、知識對象としては不可還であるが、認識主觀としては過去を現在となすことができる、と云はねばならぬ。それで我々が一瞬の過去にも返ることができぬといふ眞の意義は、能働的主觀の背後に回ることとはできぬと云ふことでなければならぬ、自覺的體系に於て自己が全自己を對象することができぬといふ意味でなければならぬ。想起されたる過去の我は眞の過去の我でないといふことは、要するに我は不可測である、我の底には如何なる錘

を以てしても達することはできぬといふことである。過去であるから返ることはできぬといふのは、却つて時を空間的に考へたもので、斯く考へることそれ自身が既に過去に還り得ることを證して居るのである。我々の記憶といふのは過去を現在化する作用である、過去の經驗内容を對象化する作用である、要するに時間を超越する意識作用である、故に過去を想起する記憶は直に未來を想像する作用である。ベルグソンは一瞬の過去にも返るとができないと云ふが、我々が時間を超越して圓錐形の廣き底面に返ることができればできる程、そこに大なる創造があるのである、創造するといふのは、却つて深く自己の根柢に返ることであると考へることもできる。記憶作用に於て、我々は現在の自己を超越して個人的自己の全體を統一し、思惟作用に於て、我々個人的自己を超越して超越的自我の全體を統一し、意志に於て我々は認識の世界を超越して、實在全體を統一すると考へることが出来る。記憶によつて我々は個人の根柢から働くことができ、思惟によつて我々は客觀界の根柢から働くことができ、意志に依つて我々は種々なる客觀界を超越して、創造的進化即ち純粹持續其物となるのである。それで記憶から思惟に、思惟から意志に、漸次に小なる立場より大なる立場に進み、淺き根柢より深き根柢に達するに従つて、そこに自由の世界、創

造の世界がある。記憶の立場即ち表象の立場に於ては、そこに自由なる想像の世界、空想の世界があり、思惟の立場に於ては、そこに科學者の所謂假說の世界があり、意志の立場に於ては我々は自由に實在を創造することかできる、即ち自由意志の世界がある、何の立場に於ても、*esse*の外に *esse* を含んで居るのである。我々が一瞬の前に還ることができないといふのは、限定せられた對象界に於てのことである、即ち *esse* の上に於てのことである、*esse* + *esse* の高次的立場の上に立つた時、我々は過去に戻ると思へることができ、而してこれが意志の立場である。マテリリンクは我々は道德的意志に依つて過去を動かすことができると云ふが、カントの定言的命令といふ如き道德的意志はすべての世界を超越した立場である、我々は此立場に於て如何なる世界を取るかは自由である。

以上論じた如く、意志は所謂時間的關係を超越して過去を現在となすことができる。としても、我々は尙意志活動其物の順序といふものを考へることができ、である。う、意志の活動は一々事實であつて、その間に動かすことのできない順序があると考へることができ、でもあらう。ベルグソンの一々性質的に異なつた繰返すことのできな^ら實時 *la durée réelle* といふのは之を意味するのである。併し余の考では、意

志は過去から直線的に歩み來り、又未來に向つて歩み行くのではない、意志の進行は或一點を中心として圓狀に廣がり行く波動的進行である、意志は何時でも同一の中心から働く、意志の中心即ち眞の自己は何時でも現在であるのである。意志の働いた足跡を反省して、之を直線的に連結して見れば、意志の動かすべからざる順序といふものを考へることができらうが、此の如く順序附けられた意志は既に化石せられた意志であつて、生きた意志ではない、眞に生きた意志は全然自由でなければならぬ。自由に種々の經驗の立場を取捨し、一つのアプリオリから他のアプリオリに自由に移り行くことが、眞の意志の活動である。過去を翻して現在となすのが意志の作用である、意志は順序を附けらるべきものではなく、順序を附けるものである。意志はフイテの所謂單に動的 *schlechthin tätig* なるものでなければならぬ、或一つのアプリオリを立場として、之から進んで行くのが知識の立場であるとすれば、此等のアプリオリを超越するのが意志の立場である、即ち意志は絶對の反省であると云つてよい。意志は無限なる可能性の結合點である、コーエンは與へられたものは求められたものであると云ひ、有に對する無は單なる無ではなく、*Mitsein* であると云ふが、余が嘗て云つた如き *sein + haben* の立場は即ち意志である。認識の立場は消極的無

限の立場であつて、意志の立場は積極的無限の立場である。意志は知識の極限である。一つのミの立場からその *Entwickelungs* の方向に向つて進んで行くのが知識である。即ち消極的無限の立場である。此の如き無限なる可能性即ちアプリアオリの結合が意志である。即ち積極的無限の立場である。ヘーゲルの語を以て云へば、理念それ自身の發展進行に當つて、抽象的立場が具體的立場の中に *aufgehen* せられた所が意志である。意志は何時でも具體的である。此故に意志は知識に對しては創造的である。エラシオン・ヴェイタールである。論理より數理に、分離數より連續數に飛躍するにも、意志に依ると云ふことができる。ベルグソンは純粹持續に於ては一瞬の過去にも返ることができないと云ふが、此言は既に意志の足跡を反省した言である。若しベルグソンの創造的進化が此の如きものならば、それは死物である。生きた純粹持續ではない。眞の純粹持續は一面に於て無限の發展たると共に、一面に於て「永久の今」でなければならぬ。ベルグソンは後の方面を見逃して居ると思ふ。生きた持續は伸縮自在であつて、何れの點にもその尖端を向け得ると考へねばならぬ。恰も物體の位置に依つて重心が變ずると同様でなければならぬ。

意志は右に云つた如く物理的時間を超越すると考へねばならぬとしても、尙何等

かの意味に於て意志の順序といふものを考へることはできないであらうか、意志は何處までも絶対自由と考へねばならぬかと云ふ疑問も起るであらう。若し時間的順序といふものを離れて、経験の内面的順序といふ如きものを考へることができらば論據と歸結 Grund und Folge との論理的順序といふ如きものか、又はフッサールの phänomenologische Zeit といふ如きものを考へることができらばであらう。意志作用は此等の秩序に制約 Bedingen せらるべきものと考へ得るであらうか。或一つの幾何學的定理を證明するに當ては、その間に動かすことのできない根據と歸結の順序といふものがあるであらう。併し幾何學の如き純理的關係に於ては根據が歸結を制約すると考へられると同時に、後者が前者を制約すると考へることもできる、自然科学的因果關係に於てもその通りである。ヘーゲルが „die Suche ist selbst eine der Bedingungen“ といふのは之に依るのである。原因と結果とは左右といふ如く、その根柢に於ては一である、内面的には靜的統一であると考へることができらる。當にその證明に於ける論據と歸結との關係が右の如くなるのみならず、我々は一つの幾何學的定理の證明を何れの一端から考へても、理其物には何等の關係もない、眞理の發見が往々偶然なる端緒によるのを見ても明である。右の如く考へて見るならば、所謂思

惟の内容といふ如きものと意志の作用との間には、何等の交渉もないと考へることが出来る、フッサールの所謂本質の體系といふ如きものも同様であると思ふ。科學者は是に於て、意志の背後に生理的素質とか、更に一層進んで化學的又は物理的因果關係といふ如きものを假定するかも知らぬが、此の如き説明は前後顛倒 *hysteron proteron* に過ぎない。意志の原因は到底不可解となる、意志は神秘である、カスバル・シュミットが有名なる „Der Einzige und sein Eigenhüm” の終に於て、神に就て *Namen nennen Dich nicht*” と云ふことは「私」に就ても云ふことが出来る、如何なる概念も「私」を言ひ現すことはできぬ、如何なる性質も「私」を盡すことはできぬ。單に所有者としての「私」といふことも創造的無より生れ來つて創造的無に返り行くと云つて居る、此等の語は意志の真相を言ひ得て最も深きものであると思はれる。

思惟の對象は右に云つた如く意志作用とは何等の交渉もないのみならず、思惟作用すらも思惟の對象其物とは關なきものと考へられる。思惟の對象が思惟作用の中に入つて思惟の内容となるが、思惟對象が思惟せられると否とは對象其物に何等の關係もないと考へられて居る。此考を嚴密にすれば思惟作用とは單に思惟對象が意識せられるといふことに過ぎない、意識せられると云ふことは受働的と能働

的との二種に考へられるが、その能働的なる場合が思惟作用と考へられるのである。而して此の如き思惟作用は一方から考へれば、一種の意志作用である。正しく云へば、或一つの數學的眞理といふ如き思惟對象の意識せられるのが思惟作用であつて、此の如き思惟作用の起源例へば何の點から始めるかと云ふ如きことが意志作用に屬するといふことができる。それでは思惟の對象が意識せられて思惟の内容となる時、思惟の對象に何物が加つて來るのであるか。意識せらるゝといふことは意識内容に何物も加はらないと云ふが、何物も加はると考へなければ、意識せらるゝと否との區別は無意義である。此處に解き難き疑問がある。余の嘗て云つた如く、思惟作用は思惟對象の動的状態、即ちその發展の相として考へて見ても、物が働くといふことは他との關係に入ることとでなければならぬ、思惟作用といふのは思惟對象の種々なる體系が相互關係に入る點と考へねばならぬ。固より理想的なものは如何に密接に關係し來るとも、それ自身に依つて實在的となり得ぬと考へられるでもあらう。プラトンの理念が如何にしても現實の世界に墮し來るか、到底説明することはできぬ、恰も或一つの有理數を如何に無限に分ち行くも、極限點に達することができなると一般である。我々は理想から出立しては到底現實に達することはでき

ぬ、思惟對象の關係から思惟作用に到ることはできぬ、思想の世界からしては現實は達すべからざる無限の距離である。併し翻つて之を考へれば、現實を離れて理想はない、作用を離れて對象はない、現實は無限なる意味の統一、無限なる思惟體系の極限である。消極的には達することのできない意味の極限點は、積極的には此現在である、此の意識である、現在は即ち意識、意識は即ち現在である。勿論、普通に考へられる現在とか意識とかいふものは、此の如き豊富なる内容を有するものとは考へられない、併し、此の如き現在や、此の如き意識は、考へられた現在、考へられた意識である。眞の現在はコーエンの所謂創造的點 *erzeugender Punkt* の如きものでなければならぬ、曲線によつて點が與へられるのではなく、點によつて曲線が與へられるのである、自然的因果に依つて意識が生ずるのではない、意識に依つて自然が與へられるのである。意識の範圍を知る意識は意識の範圍の中にはない、刺戟の數を識別した意識は此數を超越して居らねばならぬ。普通には現實の經驗から抽象したものを實體化して、翻つてこの具體的現實を此の如き實在の結合に依つて説明しようとする、自然科学者の考方の如きがそれである。併し現實は達することのできない海の底である、ベームの所謂 *Ungerund* である、その底に達し得るものならば現實ではない、實在の實在

たる所以はこの達し得べからざる内容の無限にあるのである。一方より考へれば何等かの意味に於て我々の知り得べからざる實在はないと考へられる、併し又一方から考へれば、知り盡されたものは實在でない、要するに實在とは我々の思惟の及び得ざる極限に過ぎない、カントの物自體は此の如き意味の極限でなければならぬ。

此の如き思惟の達するとのできない深さ、思惟體系の統一の極限、即ち積極的には自動不息なる此現在、それが意志である。創造的無より來つて創造的無に入り行く意志は實在であり、意識である。思惟の體系から見れば、意志は測知し難き無限である、之を合理的に説明しようとするれば、思惟に對して偶然的と考へるの外はなからう。併し反省のできない意志は、反省を超越して、却つて反省を成立せしめるものである否、反省それ自身が既に一種の意志である。此意味に於て、昔、ディオニシウス Dionysius Areopagiticus が神は一切であると共に、一切でないと言つた語は直に移して意志に當嵌めることができる。若し意志の秩序を問ふものあらば、意志は一方に於て無限の秩序を藏すると答へねばならぬと共に、一方に於ては、何等の秩序をも有せぬと答へねばならぬ。何となれば、意志は順序つけられるものでなく、順序を構成するものなるが故である、意志は因果には支配せられない、何となれば因果を構成するものなる

が故である。余は是に於てスコトウス・エリギナが“*da praedestinatione*”に於て、神を絶對的意志となし、之に内面的必然すらも拒んだといふことに、深い意味を見出さざるを得ない。意識せられることは意識内容に何物をも加へないとか、意志は知識内容に對して偶然的であるとか云はれるが、こは意志が一切を超越して、而も一切を成立せしめるが爲である、意志はすべての内容をして實在的たらしめるものなるが故である、恰も「ある」といふ述語が主語に何等の内容を加へないと同様である。

ベルグソンは實在は創造的進化である、純粹持續に於ては我々は一瞬の過去にも還ることはできないと云ふが、前に云つた如く、翻すことのできない順序として考へられるものは、既に我々の對象界に屬したものでなければならぬ、ベルグソンの所謂流れた時 *le temps écoulé* に屬したものと考へねばならぬ。縱、それが性質的であるとしても、何等かの意味に於て順序といふものを考へるからは、既に對象界に屬して、眞に創造的なる實在其物とは云はれない。此點に關しては、リッケルトなどの云ふ様に個性を現す歴史の見方は既に一般概念の上に立つものである、自然科学的見方と共に既に構成せられたものであると云はねばならぬ。眞に創造的なる實在其物はスコトウス・エリギナの考の様に、何等の必然を有せざる神の意志の如きものでなければ

ならぬ。自覺的體系に於て當爲即存在として無限の發展を考へる時、即ち一つの人格的歴史を考へる時、それは既に對象界に屬して居る、我々はその背後に、この歴史的發展を超越して而もその基礎となる絶對的意志を考へねばならぬ。前者は哲學の領分であるが、後者は宗教の領分である、自覺的體系とは意識内のことであつて、その背後には神秘の世界があるのである。ベルグソンは、創造的進化に於て、一人の畫家が人物を描く時、そのモデルや、畫家の性質や、ハレットの上に延られた色に依つて、如何なる肖像ができるかを豫知することはできるが、眞に如何なる畫が出来るか、畫家自身も知ることとはできぬ、我々の生涯の一瞬一瞬に於て我々は藝術家である、畫家の才がその作其物によつて形成せられる如く、我々の状態は刻々に我々を變じ行くのである、こは與へられた我々の性質に依ると云ひ得るであらうが、一方より見れば、我は絶えず我を創造するのであると云ひ、反主知主義の態度から、單に機械論のみならず、極端なる目的論をも排斥して居るが、ベルグソンの云ふ如き眞に我が我を没した創造的瞬間に於ては、何等の意味に於ても「時」といふべきものはない、純粹持續の「持續」といふ語も既に蛇足である、我々は進みつゝあるか退きつゝあるか、右に行くか左に行くか、我は我を知らずと云ふの外はない。エピクテートが、汝の意志は我が意志な

り、汝の欲する所に我を導け」と云ひ、基督教徒が「唯御心のまゝになし給へ」といふ深き宗教的情操のみ、能く此氣分を現し得ると思ふ。要するに、知識の方から云へば絶対の統一は無統一である、普通に無限は單に *endlos* と考へられるのと一般である、唯知識を超越した絶対的意思の立場から此の矛盾の統一を體驗することができ。スコトッス・エリギナなどが考へた様に、神の超越性 *ultima supersensualis* はすべての範疇を否定した時、意識せられるのである。フーベル Huber はエリギナが神の無限性と自覺とを結合するに苦んだといふが、眞に無限なるものは即ち自覺的でなければならぬ、自覺は無限の積極的意識である。(未完)